

第59回 大阪国際フェスティバル2021

中之島・フェスティバルホール

ブラボー！本場のオペラ

第59回大阪国際フェスティバル2021(朝日新聞文化財団、朝日新聞社、フェスティバルホールなど主催)の概要が決まった。ロッシーニのオペラ「泥棒かささぎ」は、関西初の全曲上演。イタリアの生んだこの大作曲家の作品に精通する園田隆一郎が、大阪交響楽団と演奏会形式で披露する。「4オケ」としておなじみとなった在阪4楽団の合同演奏会のほか、新国立劇場バレエ団による「こどものためのバレエ劇場 竜宮」は関西初公演。注目の演目が並ぶ。(岡岡万葉)

ロッシーニ 軽やかに 泥棒かささぎ

小太鼓の連打が死刑執行の合図を告げる。死を意識させる物語は、楽しい序曲で幕を開ける。ロッシーニが、オペラ「泥棒かささぎ」で目指した表現とはなにか。

「軽やかな音楽に感情をのせること」だと指揮者の園田隆一郎はいう。なかでも山場を迎える2幕。刑場へ向かう場面の音楽は穏やかで温かい。

ヒロインのニネッタ役は、覚悟と祈り、悲劇性を歌い方と表現で示す。そもそも細かい音を高く素早く歌う、コロラトゥーラの技巧の求められる作品で、正確になぞるだけではロッシーニにならない。「作品が解釈の幅を与えているからこそ、演奏する私たちが頭と気持ちを合わせないとつまらなくなってしまう」

重要なフレーズを必ず繰り返し返すのもロッシーニの特徴だ。2回目、3回目のメロディーがより華やかで難しくなるよう、指した。

指揮者は歌手の声に合わせて楽譜にない音符を書き加える。おのずと歌い手の数だけ、作り込まれた違いがうまれる。「作曲家の様式を守りつつ、歌手が最も輝くテンポを見つける。一期一会の醍醐味です」

園田が今作に挑むのは3度目となる。「ロッシーニの軽やかさをやみくもな速さでなく、色合いや息づかいで表したい」と、新たな段階への意欲を語った。

La gazza ladra 「泥棒かささぎ」人物相関図

フェルナンド(青山貴) 文娘
代官ゴットルド(伊藤貴之) 言い寄る
ジャンネット(小堀勇介) 恋人
ニネッタ(老田裕子) 「スプーンをなくした」
ファブリツィオ(晴雅彦) 夫婦
ルチーア(福原寿美枝)

園田隆一郎さんがおすすめするポイント

- 感情表現がさりげない
「深刻な場面でも、音楽は長調が多用されていて軽やか。歌手が歌い方や表情で内面を表現するのに注目してください」
- 重要なフレーズが繰り返される
「繰り返すたびに難しくなる歌のフレーズがあります。どう変えるかが聴かせどころです」

音楽の「地産地消」今こそ

長引くコロナ禍によって、国際航空ネットワークがほぼストップしたとあって過言ではない状況が続いている。これは将来の音楽界のありようにも少なからぬ影響を与えるであろう。

コロナ以前、クラシック音楽の「グローバル化」は目覚ましかった。日本にいながらにして欧米のスターたちがいくらかでも聴けた。海外の音楽祭を手軽に聴きに行くことも出来た。こうした便利さがコロナ以後、すぐにV字回復する保証はない。そこで何より重要になってくるのが、音楽の「地産地消」である。

岡田暁生・音楽学者(寄稿)



パイロイト・ワーグナー・フェスティバル公演で上演された「トリスタンとイゾルデ」=1967年の第10回大阪国際フェスティバル

クラシック音楽がもとも輸入品であったことは確かだが、今や日本のオーケストラは技術的にも解的にも二分に「地産」として熟成している。本場からの輸入品をありがたがる時期は、これを機にもう卒業だ。実際、外来オーケストラを聴きに行くと、「これなら日本の

地元オケの方がよほど実がある」という印象をもった経験のある人も少なくないだろう。こんなことを考えると、1958年に始まった大阪国際フェスティバルが日本のクラシック受容に果たしてきた役割のユニークさに、改めて気づく。

半世紀以上前から、それはルーチンな海外スター招聘ビジネスと一線を画してきた。能と狂言を上演する「フェスティバル能・狂言」と銘打った日を設けるなど、「日本で洋楽を迎える」という意識を強く打ち出していた。

またブルーズ指揮によりパイロイト音楽祭のスター歌手たちを呼んで「トリスタンとイゾルデ」(1967年)をやるなど、「ぶつ飛んだ」企画を連発した。指揮者としてのブルーズなどまだほとんど認知されていなかった時代に、である。

大阪国際フェスティバルが「4オケ」の企画を始めたのは2015年から。先見の明、というべきであろう。海外スターの招聘がもはや日常ルーチンになってしまっていたタイミングで、「音楽の地産地消」を新しい非日常性の創出の可能性として打ち出したのだ。

有名な序曲 聴く人の感情刺激

日本ロッシーニ協会副会長・フリーアナウンサー 朝岡聡さん

ロッシーニは「音楽界のナポレオン」です。19世紀初めにヨーロッパを席巻し、忘れられた時代もありましたが、20世紀後半から再び光が当たっている。

私のロッシーニ体験は2002年の「タンクレディ」が最初でした。同じメロディーの繰り返しが生む心地よさ、歌手に要求される技巧にビビッときた。翌年から、生誕地のイタリア・ペーザロで開かれる音楽祭に毎年通っています。

「泥棒かささぎ」は、世界的にも上演機会の少ない作品ですが、序曲は有名です。死刑の合図であ

る小太鼓の連打が、悲壮を感じさせない楽しいマーチに聞こえる。ロッシーニは悲しい場面にも悲しい音楽をあてない。リアルなドラマを音で表現しないのに、聴く人の感情を刺激します。

1幕でジャンネットが歌うアリア「さあ、この腕の中に」に注目してください。高い音を転がす技巧と、それが加速していくさまから、声という楽器の素晴らしさを味わえる。二重唱、三重唱も多く、舞台での掛け合いは音楽芝居

のよう。彼は料理好きとしても知られています。歌手という素材の組み合わせを楽しめる点は料理にも似ていますね。

ロッシーニの大きな特徴はテンポでしょう。モーツァルトやベルディのように、どんな演奏でもある程度は良く聞こえる類のものではない。園田隆一郎さんは日本でロッシーニを振らせたなら一流です。ペーザロで学んだ解釈で、歌手とオーケストラの持ち味を引き出してくれるはずですよ。

開催概要

4月17日(土)

■4オケの4大シンフォニー2021
4月17日(土)午後2時▽日本センチュリー交響楽団(久石譲指揮)ベートーベン「交響曲第8番」、大阪フィルハーモニー交響楽団(尾高忠明指揮)ショスタコーピチ「交響曲第5番」、大阪交響楽団(オーラ・ルドナー指揮)メンデルスゾーン「交響曲第4番『イタリア』」、関西フィルハーモニー管弦楽団(飯守泰次郎指揮)シベリウス「交響曲第2番」▽S席9500円、SS席1万1千円、学生席3500円(他の席種は完売)▽協賛:朝日放送グループホールディングス、サントリーホールディングス、竹中工務店



久石譲 ©Omar Cruz

尾高忠明 ©Martin Richardson



オーラ・ルドナー ©Marinko Belanov

飯守泰次郎

4月18日(日)

■提携公演「東京都交響楽団・大阪特別公演」
4月18日(日)午後2時▽指揮:大野和士▽カレヴィ・アホ「ティンパニ協奏曲(2015)」日本初演、マラー「交響曲第1番『巨人』」▽S席6000円~B席3000円。3月14日から一般発売

◇チケットはいずれもフェスティバルホール(06・6231・2221、https://www.festivalhall.jp)ほか主要プレイガイドで発売

6月5日(土)

■ロッシーニ作曲・オペラ「泥棒かささぎ」(演奏会形式)
6月5日(土)午後2時▽指揮:園田隆一郎、ステージング:奥村啓吾、出演:晴雅彦、福原寿美枝、小堀勇介、老田裕子、青山貴、伊藤貴之、森季子、清原邦仁、西尾岳史、片桐直樹、合唱:関西在住のソリスト陣による特別編成の合唱団、管弦楽:大阪交響楽団▽S席8500円、A席7500円、B席6500円、SS席9500円、BOX席1万2500円、学生席3500円ほか▽協賛:朝日放送グループホールディングス、関電工、ダイキン工業、大和ハウス工業、高砂熱学工業、竹中工務店、西原衛生工業所

9月23日(木・祝)

■新国立劇場・こどものためのバレエ劇場「竜宮 りゅうぐう」~亀の姫と季の庭~
9月23日(木・祝)午後2時▽演出・振り付け:森山開次、出演:池田理沙子、奥村康祐ほか▽一般発売は6月予定▽協賛:朝日放送グループホールディングス、竹中工務店



©鹿野麻司